

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立巨勢小学校
1 前年度 評価結果の概要	・「笑顔かがやく子供」の育成のため、知・徳・体の面から指導を積み重ねてきたが、日々、他者を傷つけてしまう言動や落ち着いて学習に向かえない場面が多く見られた。まずは安心して過ごせる学級づくり目指して、教師の学級経営力や授業力向上を図ってきたい。 ・特別支援学級にも、普通学級にも個別の支援が必要な児童が多くいる。生活支援員や特別支援学級支援員の支援はあるが、緊急の支援要請も多くある。特別支援教育に関する教員の専門性の向上は、学校全体の教育活動の充実に欠かせない課題である。 ・学習指導、生徒指導ともに、学校全体で行う取組については、全教職員で共通理解して行うことで効果的な取組となる。「あたりまえのことをきちんとする」の達成のために、全教職員が項目を意識して取り組む必要がある。
2 学校教育目標	「笑顔かがやく子供」の育成 ～「本気で」「元気に」「根気よく」取り組むよさに気づき、行動する子供～
3 本年度の重点目標	① 自分で考え行動できる児童を育てる ② 「あたり前のことをきちんとする（凡事徹底）」指導の継続・推進・深化 ③ 異学年活動や地域、幼保小中連携など、つながりの中で子供を育てる体制、体験活動の充実

4 重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価		主な担当者							
(1)共通評価項目				中間評価		最終評価									
評価項目	重点取組	取組内容	成果指標 (数値目標)	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果								
●学力の向上	○(学校独自重点取組)全職員で共通理解と共通実践に取り組む。 ○分かりやすい授業の実践を通して、児童の学びの喜びと自己肯定感を高める。	○学力向上対策評価シートでの取り組みで、成果として児童評価80%以上。	○「友達と仲良くできた」と回答する児童が80%以上。 ○「学校は楽しい」と回答する児童が80%以上。	B	・校内研究の単元を中心に「振り返り活動」に取組んでいる。今後、他教科・他単元に広げていけるようにしたい。 ・校内研究に取り組むことで、まずは児童家の学習を把握する目を養い、授業づくりを生かしている。	A	・「振り返り活動」を行うことで、授業内容の整理、次時への見通しがつき、学習のリズムができた。 ・児童へのアンケートより、自分で集中して問題が解けた87%、友達と話し合い一緒に学習ができた81%となり、校内研究を通して学習への意欲が高まった。昨年度は72%だったので継続研究の成果も見られた。	A	・フリー参観時には、楽しみながら学習している児童の様子が見られた。また、上級生になるほど学習規律がしっかり身につけている。 ・どう伝えるか、どう教えるかなど、個性性や集団性も踏まえた取り組みを継続して頂きたい。	教務主任、研究主任					
		●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「友達と仲良くできた」と回答する児童が80%以上。 ○「学校は楽しい」と回答する児童が80%以上。	A	・道徳の学習や人権教室などを通して、自他の良さに気づき、尊重し合う心を育てる。 ・挨拶運動や縦割りグループなどの活動を通して、全職員が児童に関わりを持ち、良さを見つめ称賛する。	A	・人権教室でほかほかカードを記入し、自分の良さを友達から伝えることで、自己肯定感が上がった。 ・「学校は楽しい」と回答した児童は90%いた。「友だちと仲よくできた」と回答した児童は94%いて、友だちとの関わりの中で学校生活の楽しさを感じている児童が多いようだ。	B	・ほかほかカードを学期に1回実施することで、同級生だけでなく、異学年に書く所も広がりが見られた。 ・「学校は楽しい」と回答した児童は88%、「友だちと仲よくできた」と回答した児童は94%だった。行事等を通して、友だちとの関わりが深まり、学校生活に満足している児童が多いようである。	B	・児童が生き生きと楽しく学校生活を送っている姿は随所に見られた。成果指標は超えているが、現場の感覚として更に思いやりの指導が必要との評価らしいことをふまえての評価。 ・校長先生の毎朝の進学路の見回り、児童への声かけ、見守りには頭が下がる。	道徳担当 人権・同和教育担当			
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「困った時に先生や友達に相談できた」と答えた児童が90%以上。	○「いまのきもちカード」「あのねタイム」等を使い、子供の悩みに寄り添い、困り感を早期に発見、解決していくようにする。 ・いじめの早期発見ができるよう、日記などを通して子供の日常が見えるようにする。	B	・「いまのきもちカード」で困り感を表している児童には、聞き取りを行い、その内容や対応について記録をし供覧をかけた。アンケートでは81%の児童が相談できたと思えた。毎月の取組をしっかりと進めていきたい。	B	・「いまのきもちカード」や学期に1回の「あのねタイム」等で困り感や悩みを表している児童には聞き取りを行い、その内容や対応については記録し情報共有を行った。 ・困ったときに先生や友達に相談できたと思えた児童が75%で中間評価の時から下がって、ほかほかカードでも毎月の取組を大切にしていきたい。 ・いじめ事案については、いじめ防止対策校内委員会で情報共有し、聞き取りや保護者への連絡など早期の対応を心かけた。対応が難しい事案もあるが、学校としてできる限りの対応を続けている。	B	・児童間のトラブルの状況から、保護者の間の人間関係や地域の風潮も関わっている気がした。 ・保護者へも学校のいじめ問題への取組を幅広く知って頂くような取り組みもあって良いかと思う。直接学校側へ確認する前に、まずは子供が解決する能力が高める必要があると思っているので、担任の先生が対処された後、保護者がいかに子供の成長を高めていけるのか？という点も課題感があるかも感じる。	B	・教育相談担当者 心づくり部				
		●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	B	・教師が児童の良さや強みを伝え、児童同士がお互いに認め合える学級づくりを行う。 ・キャリアパスポートを学期に1回活用し、自らの夢や目標を考えさせる。 ・出前授業やゲストティーチャーを迎えた授業づくりを行う。	B	・「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童は89%であった。授業や学校生活の日常的な関わりの中で、ほかほかカードの機会を今後も大事にしていきたい。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童は79%であった。後期における総合的な学習のキャリア教育の充実を図りたい。	B	・「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童は87%であった。年度当初の目標を共有し、各学級学年で取り組むことができた。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童は80%であった。学年の発達段階に応じてゲストティーチャーを招いた授業を組んだり、体験学習を取り入れた取り組みができた。	B	・自己肯定感を高める場面をたくさん作ってほしい。子どもたちが夢を持って環境づくりはともかく、学校だけでなく地域でも作っていかねばならないと思う。 ・「目標について考えさせる」と先生から良さを伝えて頂くことがお互いに認め合える協働性が高まると思う。一人でも多く、子供の時から、夢や目標を持つ大切さやお互いを認め合う協働性を高めていって欲しい。	総合担当 学び部			
●健康・体づくり	○(学校独自重点取組・任意)つながりの中で子供を育てる体制、体験活動の充実	○「たてわり班で楽しく活動することができた」と回答した児童90%以上。	○「たてわり班で楽しく活動することができた」と回答した児童90%以上。	B	・月2回程度でたてわり遊び、1年生を迎える会や春の遠足、運動会など、たてわり活動を設定し、異学年交流の場を設ける。 ・1年生と6年生、2年生と5年生がペアとなりトイレ掃除を行うこと等を通して、上級生としての自覚を育む。	B	・「たてわり班で楽しく活動することができた」と回答した児童は92%であった。熱中症予防のため室内での縦割り活動が少なかったが、リーダーの6年生が室内遊びの準備をして楽しく活動できていた。月2回の「さわやかタイム」(縦割り活動)をできる限り確保していきたい。	B	・「たてわり班で楽しく活動することができた」と回答した児童は92%であった。感染症予防のため室内での縦割り活動が少なかったが、リーダーの6年生が室内遊びの準備をたて楽しく活動することができた。	A	・地域事業・活動の中でその異年齢間の交流を意識した場面づくりや声かけなどを、もっと充実せたいと考えていきたい。また、縦割り活動は成長に時間がかかるが根気強くがんばってほしい。世の中(社会)は縦割りである。	A	・成果指標は満足する結果となっているのでAでよいが、下校時の安全はさらに取組を要す。 ・下校時に突如発生する事故が発生しているとのことで、下校時においても見守り活動ができないかということを中心に提案し、縦割り活動を展開していく流れを進めていければと思う。 ・交通安全教室を子供と親が受け、下校時に危ない箇所を確認しながら帰ると、GPSは便利で、どこを帰ってきているかはわかるが、帰ってきているときに何をかまはわからないので、保護者間でもGPSのみで安心してはダメという意識も高める必要もあるかと感じた。	B	・体育担当 たくまし部
		●健康・体づくり	○様々な危機(アレルギー、熱中症、食中毒、けが予防等)に対する管理意識を高める教員が100%を継続する。 ○防災避難訓練を行い、危機管理意識を高めた教員が100%を継続する。	○様々な危機(アレルギー、熱中症、食中毒、けが予防等)に対する管理意識を高める教員が100%を継続する。 ○防災避難訓練を行い、危機管理意識を高めた教員が100%を継続する。	B	・学校で起こりうる様々な危機に対応するため、職員研修を行う。その上で、月1回危機管理に関して情報共有し、改善対応する。 ・防災避難訓練を年に3回以上開く。	B	・春は火災避難訓練をし、消防士の方に事後指導を職員に共有した。 ・夏休みの不審者対応職員研修をし、9月に不審者対応避難訓練の実施をし、児童、教師の防災意識が高まりつつある。	B	・1月に地震・津波避難訓練を実施した。事前指導、実践、事後指導で児童・教員共、非常時におけるべき行動を理解した。 ・研修や訓練により様々な危機(アレルギー、熱中症、食中毒、けが予防等)に対する管理意識を高めた教員が100%であった。	A	・危機管理は、報告、連絡、相談が初期の対応。 ・アレルギーに関する専門的知識を全職員が持ち、共通認識を徹底することで事故を未然に防げると思う。子どもたちにもある程度の知識を。 ・意識は下がっていくものであり、情報共有を行いながら、日々の業務の中で安全意識の向上に努めて頂けたらと思う。	A	・安全担当、給食担当	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 ●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	B	・金曜日の終業前10分間を「とのえタイム」とし、事務管理・出退勤システムや机上の整理、次週の見直しを持つ等、勤務を円滑に行うための時間を設定する。 ・原則金曜日を「定時退勤日」とするが、週に1日は定時に退勤する日を設ける。	B	・「とのえタイム」を位置づけ行事黒板への提示をしているが、会議等が入ることも多くて呼びかけが充分にできず、定着しているとは言えない。 ・半数以上の職員が10日以上休年休を既に取得している。冬休日までで、計画的な年休の取得を呼びかけていく。	B	・管理職や初任者が時間外在校等時間の上限(45時間)を超えることが多かったが、ほとんどの職員が遵守できた。 ・令和6年の年次取得日数14日以上は、17人中10人で60%ほどの達成率であった。心身を健康に保って児童に接するためにも、年休取得の推奨と業務の平準化を図る必要がある。	B	・個性がある児童、保護者を対象にしている限り、一緒に勤務時間の厳守は不可能である。先生方の頑張りを評価するようにしてほしい。 ・先生方の意識改革や業務能力や社会人基礎能力を高め、誰もがお休みや残業削減できるようなればと思う。	B	・教頭、事務		
		○(学校独自重点取組・任意)特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○「視覚化と見通しを持たせることを意識して指導した」と回答した教員が85%以上 ○「個に応じた対応(学習・行動)ができた」と回答した教員が85%以上	B	・特別支援教育に関する研修会の実施 ・配慮が必要な児童についてのケース会議の開催、関係者間での情報共有 ・うまくいった支援等の情報共有	B	・職員への聞き取り調査で、85%以上が「視覚化」「見通しを持たせる」「個別の対応」ができていたと回答した。また、各担任が、個別支援の必要な児童について、職員、保護者との情報共有をしている。	B	・職員へのアンケートで、「個に応じた対応(学習・行動)」については、96%が「だいたいできています」と回答した。昨年度より職員の意識が高まっている。 ・なかよしチーム会議を月1回程度開催し、情報共有を努め、きめ細やかな支援体制作りへの取組ができた。	B	・多くの特支児童に先生方は熱心に指導されていると思う。地域でも評価されている。 ・年々増加の支援学級の増加特支教育の在り方でも変化を伴い、研修を受けなどの業務、一人一人の子どものケースに合わせた対応等々、課題もたくさんで苦労されていると思う。	B	・特別支援教育担当		
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価		主な担当者							
評価項目	重点取組内容	取組内容	成果指標 (数値目標)	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果								
○生徒指導	○(学校独自重点取組・任意)児童生徒に定着させたい生活目標を達成するための指導の充実	○生活目標を達成することができた」と回答した児童が80%以上。 ・全校の集いで生活目標について指導し、各学級で具体的な目標を作る。 ・生活目標や学校生活のきまりについて毎週放送をし、児童の意識変容を促す。	○生活目標を達成することができた」と回答した児童が80%以上。 ・「全校の集いで生活目標について指導し、各学級で具体的な目標を作る。」 ・生活目標や学校生活のきまりについて毎週放送をし、児童の意識変容を促す。	B	・毎月の生活目標については86%の児童が「よくできた」と回答している。毎日の放送と月1回生活目標の振り返りを行い、児童が生活目標を意識して行動できるようにしている。	A	・84%の児童が、毎月の生活目標が「よくできた」と回答した。挨拶・名札着用・廊下歩行等については、全体・個別に指導を繰り返してきており、児童に浸透しつつある。児童が主体的に生活目標に取り組めるよう、児童発達の取り組みを実践してきている。	A	・生活面での生徒指導の成果は、日頃学校を訪問した際の挨拶や態度に反響されている。 ・低学年からの挨拶や態度に反響されている。 ・低学年からの挨拶や態度に反響されている生活の中で児童同士で伝えあえることや願いができるという意識変容を促す取り組みはとても大事だと思う。	A	・生徒指導、心づくり部				
●…果共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育				中間評価		最終評価		主な担当者							
5 総合評価・次年度への展望	・自分で考え行動できる児童、あたり前のことをきちんとする児童の育成をめざして、職員の共通理解を図り、知・徳・体の面から取組や指導を積み重ねてきた。校内研究や生徒指導など成果が現れているところもあるが、取組や指導の継続を図り、重点目標の達成をめざしたい。 ・特別支援学級にも、普通学級にも個別の支援が必要な児童が多い。生活支援員や特別支援学級支援員の支援はあるが、特別支援教育に関する教員の専門性の向上は、学校全体の教育活動の充実には欠かせない課題である。また、今年度、SCやSSW、病院、発達支援センター等関係機関との連携を進めてきたが、今後も連携を図り、個に応じたよりよい支援を充実させていきたい。 ・まちづくり協議会をはじめとした地域の団体に体験活動や行事で多くの支援をいただいた。中学校や幼稚園・保育園とのつながりを含め、学校内でも異学年の交流の機会を大事にし、児童の豊かな心や社会性の育成を図ってきたい。														